

## 「漱石と『資本論』」 小島英俊・山崎耕一郎著（祥伝社）より

◎初版は 1000 部

- ・ 『資本論』第1巻は、1867年に最初にドイツ語版で世に出た。
- ・ この時の印刷部数はたった 1000 部。
- ・ しかも、それが売り切れるまで 4 年かかっているから、最初はいかに無視・冷遇されたかがわかる。
- ・ 1883 年、マルクスの没後、その遺志を継いだ盟友エンゲルスによって、ドイツ語版の第 2 巻が、1885 年、第 3 巻が 1894 年に出版された。
- ・ ドイツ語版以外を見ると、1872 年に第 1 巻のフランス語版が刊行され、1 万部が売れた。
- ・ 同年には、第 1 巻のロシア語版が 3000 部で刊行、1 年間で完売した。
- ・ ロシア語版の第 2 巻、第 3 巻は、ドイツ語版以外で、先陣を切って刊行された。
- ・ しかし、英語版の第 1 巻は、ドイツ語版に遅れること 20 年の 1887 年ようやく刊行された。
- ・ 高島素之が日本ではじめて『資本論』の全巻を翻訳、1920 年から 1924 年に刊行された。
- ・ 日本における『資本論』普及の幕開けである。その第 1 巻は 10 万部以上売れたという。
- ・ 1852 年に共産主義者同盟の解散。これ以降マルクスは 10 年以上、組織活動から遠ざかる。
- ・ 苦しい生活の中、マルクスは毎日のように大英博物図書館に通い、朝 9 時から夜 7 時まで読書と思索に没頭した。
- ・ その成果の第一弾が、1859 年の『経済学批判』であり、労働力の搾取によってのみ生まれる「剰余価値学説」を確立した。
- ・ そして、8 年後の 1867 年、それを発展させた『資本論』第 1 巻が完成するのである。
- ・ マルクスは不摂生もあって病気がちだったが、肝臓肥大という深刻な診断を受ける。
- ・ マルクスは 1883 年 3 月 14 日に 64 歳で亡くなった。
- ・ マルクスの膨大な遺稿は、すべて盟友であるエンゲルスに預けられた。エンゲルスは遺稿を整理して、1885 年 6 月に『資本論』第 2 巻、さらに 1894 年 12 月に第 3 巻を出版し、翌 1895 年に死去した。

## 「資本論入門」 向坂逸郎著（岩波新書）より

- ・ 『資本論』は、1867年、明治維新の前の年に出た。
- ・ はじめ、『経済学批判』を書きつづけて行くつもりで、1859年、『経済学批判』第一分冊を公にした。
- ・ しかし、マルクスは、この構想をかえて、新たに（『資本論』の）原稿を書きはじめた。
- ・ 『資本論』第一巻の序文の中でいっているように、『資本論』は、その内容において『経済学批判』の続巻である。
- ・ しかし、（『資本論』が出た）1867年まで、（『経済学批判』の第一分冊が公になった年からは、）9年近くもかかった。
- ・ それは、その頃のマルクスの手紙によると、マルクスが病気がちであったからである。
- ・ 若い頃のマルクスは、官憲の記しているところによると、頑丈なようであったが、永年の貧乏と社会主義運動上の労苦とが、彼の健康をむしばんでいって、『資本論』の原稿を第一巻にまとめる頃は、ずいぶん病気になやまされていたようである。
- ・ 第一巻は、1000部刷られたが、これを売りつくすのに約4年かかった。マルクスの貧乏はつづく。
- ・ 『資本論』第一巻の第二版は、やっと1872年にできた。
- ・ 第三版は、1883年、マルクスの死後に、エンゲルスの手で発行された。
- ・ 第三版のための多少の改定は、マルクスの生前に、マルクスの手でなされていたが、本になったのは1883年11月。同年、1883年3月14日にマルクスは（すでに、）死んでいる。
- ・ 『資本論』第二巻、第三巻は、マルクスの死後に公刊された。
- ・ マルクスは、『資本論』第三巻の最後まで、大体、その構想にしたがって、下書きをつづけていた。
- ・ この下書きの全部は、まだ印刷されたことがない。
- ・ 戦前に出た『マルクス・エンゲルス全集』（これはナチスのために刊行ができなくなって、中止された。）の計算によると、この草稿を全部印刷すると、現行『資本論』の約四倍ぐらいになるということである。
- ・ エンゲルスによると、この下書きは、かなりよくまとまっており、詳細に書かれているところもあるが、せいぜいヒントを与える程度にしか書かれていない所もあるし、同じテーマについていろいろの所に飛びとびに書かれていることもある、とのこと。
- ・ マルクスの原稿は、きわめて読みにくく、小さな字で書かれ、消した字があり、書入れが

行間にあたりで、あれをよく読むのはエンゲルス以外になかったかも知れない。よほどマルクスの字に慣れないと読めない。

- ・（ドイツ留学のとき、）社会民主党の書庫の金庫の中に保留されていたマルクスの原稿を見せてもらったことがある。（全集作成のため、）マルクスの原稿の上に眼鏡をおいて、分かりにくい字を判読して、書き写している人がいた。
- ・このような原稿から、エンゲルスは、『資本論』第二巻（1885年）、第三巻（1894年）をつくりあげた。
- ・あるところは、エンゲルス自身が書いた。エンゲルスの筆になるところは、それが読者に分かるようになっている。
- ・マルクスは、別に、剰余価値に関する理論の歴史を書くつもりでいた。
- ・これを、『資本論』第四巻として公刊したい心組みであった。
- ・しかし、この第四巻は、エンゲルスの生前には、でき上がらなかった。
- ・エンゲルスはこのことを考えて、マルクスの原稿の読み方にいたるまでの手ほどきを、カール・カウツキーにしておいたらしい。
- ・それで、この第四巻に当たる部分は、『剰余価値学説史』（三巻）として、1905年から1910年の5年間に、公刊される運びになった。
- ・マルクスが、経済学に関する大著を書く計画を立ててから25年ぐらいたって『資本論』第一巻があらわれ、第二巻、第三巻が本になるには、彼の一生では足りなかった。
- ・まだまだ、印刷されていない手稿がのこっている。

## 「いま生きる『資本論』」佐藤優著（新潮社）より。

- ・ドイツ語で読むとハッキリするのですが、第一巻の書き方と第二巻目以降の書き方や文体は全然違います。
- ・『資本論』は二巻目以降となると、文体ががらりと変わり、読みやすく、意味もわかりやすい。ただ、ほとんど無味乾燥で退屈な文章なんです。
- ・若い頃には下手な詩人でもあったマルクスが書いた第一巻の文章は、ドイツ観念論の影響を受けた文体と、ぐねぐねとした論理構成で難解なのですが、言説が重層的になっていて知的刺激を強くうけます。
- ・それに、文学趣味的な比喻もあるし、文学作品からの引用もある。なぜ、こんな違いが生じたのか。
- ・マルクスが自分の筆で書いたのは『資本論』の第一巻だけだから。

- ・ 二巻目以降は、マルクスの盟友のエンゲルスが、マルクスの草稿を基に書いたのです。
  - ・ ですから、『資本論』の第一巻と二巻、三巻では著者が違うのです。マルクスの遺した膨大な草稿の中から、エンゲルスが「マルクスはこう考えていたであろう」という形で編纂したのが『資本論』の二巻目以降なんです。
  - ・ 実を言うと、本当はもう一冊、『資本論』の第四巻として想定されていた書物があって、実際にはマルクスはそちらのノートを先に書きました。
  - ・ 『剰余価値学説史』という大著で、エンゲルスも亡くなった後ようやく公刊されました。
  - ・ ただ、『剰余価値学説史』というのは読んでなかなか分かりづらい。
  - ・ 1859年に、マルクスは『経済学批判』という本を刊行しました。
  - ・ 構想では、これを第一部として、全六部からなる大著を数年で書き終えるつもりだったのです。
  - ・ ところが、その続編『資本論』第一巻が出たのは1867年ですから、8年もぼやぼやしていたわけですね。
  - ・ 拳句の果てに、彼の手で完成できたのはこの第一巻まででした。どうしてかと言うと、マルクスはいちばん最初の価値論のところで行ったり来たりして、何度も何度も書き直していたからなんです。
- (以上、途中まで。)

## 文庫ぎんが堂「あらすじとイラストでわかる資本論」より

- ・ マルクスが『資本論』を書いたのは、イギリス滞在時の19世紀半ばである。
- ・ 当時のイギリスは、最も資本主義経済が進んでいた国だった。
- ・ そこで、マルクスが見てきたものは、資本家に搾取され、使い捨てられるといった労働者たちの悲惨な姿であった。彼らは、まさに、資本主義社会が生んだ奴隷のような状態であった。
- ・ そんなイギリスにも資本主義体制を分析する経済学者たちがいたが、彼らは資本主義の経済法則を研究するばかりで、搾取され続ける労働者たちを救おうとはしなかった。
- ・ マルクスの武器は、経済学者としての知識だけではない。哲学者ヘーゲル仕込みの弁証法哲学、文学的知識、宗教学的知識等々を総動員したうえで、資本主義社会を賞讃する経済学者たちに立ち向かった。
- ・ 資本主義体制を批判して、搾取されるばかりの労働者を救うために、人生の大半をかけて『資本論』という大著を執筆したのだ。

- ・ マルクスが長い年月をかけて執筆した『資本論』は、膨大な量になっている。1巻だけでも分厚い書物なのに、全3巻で構成されている。
- ・ そのうちマルクス本人が書いたのは1巻部分だけ。彼は志半ばにして亡くなってしまった。残りの2巻と3巻は、友人のフリードリヒ・エンゲルスが、マルクスの残した草案をもとに書き起こしたものだ。
- ・ マルクスは資本主義体制を批判するために『資本論』を書いたわけだが、マルクスが『資本論』をいちばん読んでほしかったのは、資本主義体制で働く労働者たちだ。だからこそマルクスはこうしている。「ここで報告しているのは、あなたのことだ。」と。
- ・ ヨーロッパ各国を追放されたマルクスは、1849年8月、ロンドンへ亡命。ここから、マルクスは経済学の研究を本格的に始める。
- ・ 大英博物図書館に毎日のように通い続けて、1日8時間、膨大な書物を読みあさり、ノートにメモを取っていった。
- ・ その研究の成果として出版されたのが、『経済学批判』である。
- ・ 経済学を研究すればするほど新しい課題がみつかった。当初、『経済学批判』を全6巻とする予定だったが、予定を変更し、第2巻以降を『資本論』として、全4部構成とすることとした。そのため、『資本論』の副題は「経済学批判」となっている。
- ・ 『資本論』の刊行は大幅に遅れた。『資本論』の前身となる『経済学批判』が刊行されて7年後の1866年、ようやく、第1巻が清書できる段階になったという。
- ・ そして、とうとう、1867年『資本論』第1巻が完成する。
- ・ 続いて第2巻の執筆に取りかかるが、1883年、完成を目前にして亡くなってしまった。